

---

# 蒼の旅人

さけるチーズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼の旅人

### 【Nコード】

N0965T

### 【作者名】

さけるチーズ

### 【あらすじ】

永い眠りから目覚めた主人公・ライガ。絶大な力を持つ龍族である彼は、自分の存在理由を知るために世界を渡り歩く。そこで動き出す運命。仲間たちとの邂逅。崩れゆく世界で彼は一体何を成し遂げるだろうか…。

## 0話 遙か昔のお話（前書き）

はじめまして、さけるチーズとかいうものです。  
完結目指してがんばりますのでよろしくおねがいします。

## 0話 遙か昔のお話

・・・それは遙か遠い世界のお話。

創造主は世界を創った。

そして、世界を守護するために龍を生み出した。

やがて、大地に様々な生命が溢れ、龍たちがあらゆる生命体の頂点に立った。

そこから長い年月が過ぎて、人間をはじめとする高い知性を持つ生命体が現れた。

ヒトたちは神の存在を信じ、神が誕生した。

いつしか神たちは、力を増し世界を支える柱となった。

龍たちは強大過ぎる力があるゆえにヒトたちから妬み嫌われ、住処を奪われた。

しかし、龍たちは抵抗せず歴史の表舞台から姿を消した。

龍たちが世界の表舞台から姿を消して数百年の年月が過ぎる。

ヒトたちは高度な文明を築きあげ、魔法を発達させて、国家を作りあげた。

様々な種族が行き交うこの世界で、ヒトたちは遙か昔から世界を見守ってきた龍たちの存在を忘れていた。

やがてヒトたちは、自分の欲望の為に争うようになった。

国同士がぶつかりあい、争いがさらなる争いを生み、戦火は瞬く間

に世界中に広がった。

時間が経つにつれて戦争は激しさを増していく。

世界の柱である神たちは、争いを止めようとしないう人々を嘆き、絶望した。

そして、神たちはある計画をたてた・・・。

・・・それは、今ある世界を滅ぼし、そのあとに新しい世界を創るというもの・・・。

すべてが終わり、すべてが始まる日。

表舞台から姿を消したはずの龍たちが再び現れた。

激突する龍と神。

龍たちは世界を護るために戦い。

神々は争いのない世界を創るために戦った。

圧倒的な力を持つ彼らの争いは苛烈を極めた。

連なる山脈は跡形もなく消し飛び、

大地は歪み融解し深く抉られ、海は蒸発し、

ありとあらゆる生物は死に絶えた。

終わりを迎えるはずだった世界は龍たちによって救われた。

その人智を超えた戦いは、龍と神との双方に沢山の犠牲を出して終了した。

また、その戦いがどう終了したのかは謎に包まれて、ほとんどわか

っていない。

ヒトたちが築きあげた文明は崩壊し、後に旧文明と呼ばれる・・・。

## 0話 遙か昔のお話（後書き）

2011／11／6修正しました。

## 〈第1話〉遠き日の記憶

（・・・雨が降っているな。此処は何処だろう？）

僕は、ぼんやりする頭で考えた。

自分か気がついた時から此処に居て、今まで何をしていたのかは分からない。

自分の体は地面に寝かされていて、下には毛布が敷かれている。

僕は、まだぼんやりする目を無理やり開いて立ち上がった。

見開いた目に映ったのは、ごつごつした岩肌と、薄暗い周りを照らす焚き火だった。

どうやら此処は洞窟の中で、自分は焚き火の近くで眠らされていたようだ。

洞窟の入り口の方を見ると、雨が降っている景色が広がっていた。

そして、洞窟の入り口付近には男が壁にもたれるように立っていた。

男は僕に気づいたみたいで、こっちに近づいて来た。

「目が覚めたか、ライガ。」

（この男の人は誰だろう？）



僕は、自分の顔を覗き込んでいる男の人をじっと観察してみた。

その男は黒髪黒目で、あちこちが破れたボロボロの黒いマントを着ている。その黒いマントの下には、ひび割れている鎧が覗いている。

（何かと戦った後なのかな？）

そんなことを考えていると、男は僕に語りかけてきた。

「すまない、ライガ。私は何も守れなかった・・・。」

（何を言っているんだろう？）

「愛する家族も、親しい友人も私は誰一人も守ることができなかった。だが、私はこの世界を護る為に戦わなければならない。」

男はわけが分からず黙っている僕の肩に手を置いて、正面から僕の瞳を覗き込んだ。

男の瞳には強い力が宿っていた。そして僕の間を見てこう言った。

「何もしてやれなくて済まなかったな。せめて、幸せになってくれ。」

男はそう言うのと立ち上がって、焚き火の傍らに置いていたほのかに青白く光る大剣を背中に担いで、洞窟の外に向かって歩き出した。

「お前が最後の希望なんだ、ライガ・・・。」

男は、独り言のように呟くと目の前から霧のように消えた。

僕は急に目の前が真っ暗になり意識が途切れた。

＊

・・・長い夢を見ていた。遙か昔の、自分が幼かった頃の記憶を。

俺はガキだった頃のことを何一つ憶えていない。父母の名前も、住んでいた場所も全部。

まるで元々なかったかの様にぽっかりと抜け落ちている。

でも、自分が「ライガ」と呼ばれていたことだけは覚えている。

自分の始まりであつた、あの洞窟での出来事は今でも鮮明に覚えている。

あの、黒いマントの男は父親だったのかもしれない。

そんなことを考えている内に意識がはつきりして、俺はまだ重たいまぶたを無理やり開いた。

俺が寝ている間に何百年経っただろうか。

自分が龍族だと気づいてから、時間というものを気にしなくなったからだろう。

（ああ、またつまらない生が始まった・・・。）

## 2話 懐かしの風景

俺はベッドから上半身を起こして、辺りを見渡した。

其処には、眠りにつく前と全く同じ殺風景な部屋が広がっていた。

物が散乱している床、本が無造作に積み上げられた机、開きっぱなしの棚…。

何百年が経っているが、魔法のお陰で外界から切り離されているため当時のままだ。

相変わらずの景色が有ることに安心して、俺はベッドから立ち上がった。

立ち上がると盛大に骨が鳴って、頭痛がした。

ベッドに戻りたいという欲求を抑えつけ、軽く伸びをした。

（外はどうなっているのかな？）

外界の様子が気になりドアの方に歩いて行った。

ドアの近くの壁に立て掛けてあった無骨なロングソード片手にドアを開けた。

開けた瞬間に差し込んできた太陽の光に少し目がくらみ、軽く目を閉じた。

光に目が慣れて、前を見ると目の前には深緑の森がどこまでも続いていた。

懐かしい柔らかいような緑の匂いがし、あちこちで鳥のさえずり声が聞こえる。

ヒトが立ち入ることができない秘境。

悠久の森が果てしなく続く緑の大地。

雲一つ無い青く澄んだ空には、ワイバーンが気持ちよさそうに飛んでいる。

此処は竜たちや龍族の聖地。

もう一つ付け加えると此処は数少ない浮遊大陸の一つだ。

雲よりも高い所にあり、現存する浮遊大陸の中では一番大きいと言われている。

大陸の周りには竜巻のような気流が流れていて、竜達や龍族以外はその気流を突破することが出来ない。

歴史の表舞台から降りた龍たちの末裔である龍族達の半分以上は、この聖地と呼ばれる場所で生活している。

しばらくその風景を眺めた後、我が家の中に入って行った。

「はぁ…。」

家の中の散らかっているのを見て、思わず溜め息が出てしまった。

（とりあえず、家の中を掃除しようか。）

それが、目覚めて最初の大仕事になった。

床に散らかったゴミを片付け、雑巾をかける…

机の上の本を整理し、本棚に入れる…

ちょっとした自慢だが俺は家事全般が得意だ。

家中を納得いくまで掃除しているうちに、日は昇り昼前になっていた。

あれだけ散らかっていた部屋は綺麗になり、清潔感溢れる空間になった。

そして今は椅子に腰掛け、窓から見える緑を見ながら紅茶を飲んでいた。

（さて、ここから何をしようか…？）

正直な話、俺はやりたいことが無い。いや、見つけることが出来ないのだ。

今まで、ただ漫然と生きてきた。

何をすることもせず世界を渡り歩き、身に降りかかる厄介事をかわしながら。

そうして何事にも興味が無くなり、この場所でひっそりと眠りにつ  
いた。

そして、また新しい生が始まってしまった。

「今思えば俺は生き甲斐が欲しかったのかも知れないな…。」

そう独り言を呟いた。

（どうせ時間は腐るほどあるんだ。その中で目的を探したらいいか。  
）

俺は自分にそう言い聞かせ、旅に出る準備に取りかかった。

―そう、全ての始まりは此処からだった―

\*

旅に出る準備と言っても大層なものではない。

どうせ、行き当たりばったりの旅だ。

武器と金さえ有れば何とかなるだろう。

数ある武器の中から、無骨なロングソードとナイフ数本を選んだ。

この飾り気のないロングソードは魔剣や聖剣でも無ければ、魔法による付加効果もない。

単純に丈夫なだけ。幾多の肉を裂き、骨を断ってきたが、壊れない。

俺の一番のお気に入りの武器だ。

金の心配は要らない。

昔に使い切れないほど稼いだからな。

そして今、家の前にいる。

準備を終えた俺は、最後の大事な取り掛かっている。

この住み慣れた家を封印するのだ。

徐々に家が光に包まれていき、光が消え去った後には何も残っていなかった。

「ありがとうな…。」



長い間、俺を風雨から守ってくれていた家に心から感謝し、其処から立ち去った。

＊

俺は今、見渡す限り何も無い草原に来ている。

心地よい風が吹き抜けて行く。

（さあ、始めようか。）

頭の中でそう言い聞かし、集中した。

俺の体が見るみるうちに青い光に包まれていき、その光は徐々に大きくなっていく。

そして青い光は収まっていき、光の中から現れたのは蒼い龍だった。

深遠の海のような深い青色をした鱗。

澄み渡る空のような澄んだ空色をした目。

空を覆い隠すかのように大きな二対の翼。

他の龍と比べたら細めの胴体には、しなやかで強靱な筋肉がついている。

その姿は完成された芸術作品のようだ。

あまりにも神々しい青い龍は、二対の翼を力強く羽ばたいた。

羽ばたく度に凄まじい風圧が草原一帯を襲い、千切れた草が辺りを舞う。

そうして、青い龍：ライガは晴天の空に飛び立った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0965t/>

---

蒼の旅人

2011年11月15日00時00分発行